

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 從川端康成兒童文學創作反照芥川龍之介兒童文學創作之特質並論述文學形式分類之意義

Reverse Irradiation from Kawabata Yasunari to Akutagawa Ryunosuke by the Angle of Juvenile Literature Work: Considering the Significance of Genre Classification

doi:10.29714/TKJJ.201106.0003

淡江日本論叢, (23), 2011

作者/Author: 曾秋桂(Chiu-Kuei Tseng)

頁數/Page: 41-58

出版日期/Publication Date:2011/06

引用本篇文獻時,請提供DOI資訊,並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.201106.0003



DOI是數位物件識別碼(Digital Object Identifier, DOI)的簡稱, 是這篇文章在網路上的唯一識別碼, 用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊,

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁,開始閱讀本篇文獻 PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



從川端康成兒童文學創作反照芥川龍之介兒童文學創作之特質並論述文學形式分類之意義

曽秋桂 淡江大學日本語文學系教授

摘要

比較世界文明的日本文學作家芥川龍之介(1892-1927)與川端康成(1899-1972)一生的境遇,意外發現有許多的共通點。再者;從本身創作的文章上常常提到芥川來看,亦可以看出川端是非常注意芥川文學動態。又加諸本來就對兒童作文此課題非常關心,本身又有不少少年・少女小說創作的川端,理所當然也應該會關注在日本近代兒童文學史上留下光輝一頁的芥川兒童文學作品。於是;透過兒童文學的創作來探討芥川與川端間的關係,可謂是當急之務。

經各自釐清 8 部芥川的兒童文學作品與 14 部川端的兒童文學作品特色之後,發現兩者間是有不同的。芥川是以人類擁有的自我主義為基礎而創作兒童文學。而川端則以人類擁有的善意為基礎而創作兒童文學作品。雖有此差異但兩者並非一直平行而下沒有交集。其實兩位有名的文學家的創作主題,不因兒童文學的創作形式而改變,與其他文學創作形式的作品是一脈相傳的。

於是,在此發生了文學形式分類的必要性,須持續至何時的問題。像芥川或川端那麼有名的作家,創作了無數的文學作品,如果依文學形式分類來閱讀的話,當然對於初學者是像類似一本導覽在手,方便進入狀況。然而隨著讀者閱讀作品數量的增加,反而會因為文學形式分類來牽絆閱讀的自由。以階段性來重新思考文學形式分類的意義,亦是本論文透過考察後所得的結論之一。

關鍵字:芥川龍之介 川端康成 兒童文學 特色 文學形式分類

Reverse irradiation from Kawabata Yasunari to Akutagawa Ryunosuke by the angle of juvenile literature work: Considering the significance of genre classification

Tseng, Chiu-kuei Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

There are a lot of common denominators in circumstances for Akutagawa Ryunosuke (1892-1927) and Kawabata Yasunari (1899-1972) of a famous Japanese literature person worldwide. Kawabata was always conscious of existence of Akutagawa literature. Kawabata had the interest in child's composition and created a boy and a girl novel. Comparison of Kawabata and Akutagawa judging from the angle of the juvenile literature is one of interesting problems.

So this research has chosen Akutagawa's 8 works and 1 Kawabata's 4 works as a subject of research and has made each characteristic clear. As a result, Akutagawa drew the egoism man has, but Kawabata was drawing the good will man has. But this feature often becomes reverse to other works. This result will show a problem until when the genre as frame in literally study needs. The genre will be the guide book which enters a work. But when we depend on a sketch and a guide book forever, the danger of stereotype-ization is increasing in literally study.

Keywords: Akutagawa Ryunosuke, Kawabata Yasunari, Juvenile literature, characteristic, genre

淡江大学日本語文学科教授

要旨

世界的に名高い日本文学者の芥川龍之介(1892-1927)と川端康成(1899-1972)は境遇に共通項が多い。また、川端は芥川文学の存在を常に意識していた。同時に川端は、子供の綴り方に関心を持ち、その関心から少年・少女小説を創作した。こうした児童文学の視点から見ても、川端と芥川の比較は興味深い課題の一つである。

そこで、本研究は芥川の8作品と川端の14作品を研究対象に選んで、各自の児童文学作品の特色を明らかにした。その結果、芥川は人間の持つエゴイズムを中心に描いたが、川端は人間の持つ善意を主に描いていた。しかし、その特徴は、他の作品では逆になる場合も少なくない。この結果からは、文学研究でジャンルの区別という枠が、はたしていつまで必要かという問題が生まれる。ジャンルは作品に入るガイドブックになり、入門者の手掛かりになる。しかし、いつまでもこうした見取り図やガイドブックに頼っていると、研究自体がステレオタイプ化が進行する危険性を伴う。このことを、今回の考察を通して、呼びかけたい。

キーワード: 芥川龍之介 川端康成 児童文学 特色 ジャンル

児童文学作品の視点による川端康成から芥川龍之介への 逆照射―ジャンル分類の意義を考えて―

曽秋桂

淡江大学日本語文学科教授

1.はじめに

芥川龍之介 (1892-1927) と川端康成 (1899-1972) は日本の文学者として世界的に名高い。両氏の境遇を見比べると、意外に共通項が多い。例えば、母の愛に恵まれななかったこと¹、初恋から受けた痛手の深刻さ²、自ら命を絶った³ことなどである。特にノーベル賞受賞記念講演「美しい日本の私―その序説」 (1968) で、川端は芥川の遺稿「或舊友へ送る手記」 (1927) に触れ⁴、自作の随筆「末期の眼」の言葉をそこから借用した⁵と述べている。その「末期の眼」 (1933) では、「芥川氏を作家としても、文章家としても、さほど尊敬することは出來なかつた。それには無論、自分が遙かに年少といふ安心もあつたであらう。この安心のままいつしか芥川氏の死の年に近づき、愕然として故人を見直せば、わが口を縫はねばなるまい」 6と言っている。川端の芥川への心情は、まさに長谷川泉が指摘したように、

¹芥川は生後9ヵ月に実母が発狂し、養母に育てられた。川端は満3才に母に立たされた。

²長谷川泉(1984・初 1965)『川端康成論考増補三訂版』明治書院 P49 では、「川端は、そのほかこの少女伊藤初代のことを一連の掌の小説などに書いた。その数は十を越える。いかに、川端の心に印せられた傷痕が深かったがわかる」とある。石割透(1982)「「杜子春」」関口安義編(1999)『芥川龍之介作品論集成第 5巻蜘蛛の糸―児童文学の世界』翰林書房 P110 では、「大正四年初めの吉田弥生との失恋において、人間の奥に潜む〈エゴイズム〉に面と向かい合わねばならなかった」と指摘している。

³芥川は昭和2年(1927)35才の時に、川端は昭和47年(1972)72才の時に自殺した。

⁴「末期の眼」(1933)に1回目引用したことに次いで、35年ぶりの2回目の引用になるが、芥川への関心が並大抵のものではないことを示す。

⁵(1999)『川端康成全集第 28 巻』新潮社 P350 に、「ここでの「末期の眼」といふ言葉は、芥川龍之介(一八九二-一九二七)の自殺の遺書から拾つたものでした」とある。

⁶(1999)「末期の眼」『川端康成全集第 27 巻』新潮社 P16

「芥川の稟質は、康成に近かっただけに、かえって口を開けば、康成の方が利一よりは芥川を遠ざけるようなものの言い方をしている」「ことであろう。性質が近かったため、川端の言い方は芥川を貶しているように見受けられるが、自分の文章に芥川の名をしばしば取り上げている点から見れば、川端は芥川文学の存在を常に意識していたと言えよう。

芥川文学と言えば、歴史小説、現代小説、自伝的小説、児童文学などが頭の中に浮かんでくる。その中で、海老井英治は、特に芥川の児童文学作品は日本の近代児童文学史上に残る傑作であり、芥川文学総体の中でもかなりのウェートを占めていると高く評価している®。芥川の存在を常に意識していた川端が、芥川の児童文学作品を見逃すわけはなかろう。まして、そもそも子供の綴り方に関心を寄せ®、少年・少女小説をも創作した川端は、当然芥川の童話文学作品に目を向けていたはずであろう。このように、芥川の児童文学作品を読んだはずの川端は、どのように児童文学作品を創作したかは、稟質の近いと言われる芥川と川端の2人では解明すべき興味深い課題の一つに違いない。川端の場合、児童文学作品ではなく、一般的に少年・少女小説という言い方で呼ばれているが、芥川との比較を図るため、本論文では児童文学作品という言い方に統一することにする。

そこで、本論文では、まず、芥川、川端の児童文学作品に視点を据え、各自の特色を明らかにする。次に、川端の児童文学作品の特色から芥川の児童文学作品の独自性を逆照射しながら、ジャンル分類の意義について考えてみたい。

⁷長谷川泉(1984・初1965)『川端康成論考増補三訂版』明治書院 P70

⁸海老井英治(1981)「本文及び作品鑑賞」『鑑賞日本現代文学⑪芥川龍之介』角川 書店 P116

⁹『新潮』(1933年6月)に載せた「文芸時評」(『川端康成全集第27巻』新潮社P114)で「子供の作文を、私は殊の外愛讀する。一口に言へば、幼児の片言に似た不細工さのうちに、子供の生命を感じるのである」と川端は言っている。

2. 芥川の児童文学作品の特色

芥川のどの作品が児童文学作品に当たるかについての論説が比較的に定まっている。石割透や越智良二¹⁰などは、8 作品だという見方を示しているが、鳥越信¹¹は 9 作品だと主張している。関口安義の説¹²に従えば、芥川の児童文学作品は 10 作品ほどある。作品の数は、それぞれ違うが、指した作品はほぼ同じである。それは単なる未完の作品を入れて計算しているかどうかによる相違だけである。

2.1 芥川の児童文学作品

前述の関口安義の説では、芥川の児童文学作品に、「蜘蛛の糸」(1918.7雑誌『赤い鳥』)、「犬と笛」(1919.1雑誌『赤い鳥』)「魔術」(1920.1雑誌『赤い鳥』)「杜子春」(1920.7雑誌『赤い鳥』)「アグニの神」(1921.1雑誌『赤い鳥』)、「三つの寶」(大正 1922.2『良婦之友』)、「仙人」(1922.4雑誌『サンデー毎日』)、「白」(1923.8『女性改造』)、「三つの指環」(未完、1923頃)、「白い小猫のお伽噺」(未完、1923頃)の10作品があるという。本論文では、未完の「三つの指環」、「白い小猫のお伽噺」を除くことにし、芥川の児童文学8作品13を対象に見てみよう。

¹⁰石割透も(「「杜子春」関口安義編(1999)『芥川龍之介作品論集成第5巻蜘蛛の糸一児童文学の世界』翰林書房P110)も、越智良二も(「「杜小春」の陰翳」関口安義編(1999)『芥川龍之介作品論集成第5巻蜘蛛の糸―児童文学の世界』翰林書房P99)同じく児童作品が8作品だという見方を示した。

¹¹鳥越信は(「芥川龍之介における "童心"」関口安義編(1999)『芥川龍之介作品論集成第5巻蜘蛛の糸―児童文学の世界』翰林書房 P136) で児童作品が9作品と言ったが、それは未完の「三つの指環」を入れたためである。大阪国際児童文学館編(1993)『日本児童文学大事典第一巻』大日本図書 P14 で「計九編が現在判明している竜之介の児童文学である」と記述されている。

¹²関口安義(1999)「解説」関口安義編『芥川龍之介作品論集成第5巻蜘蛛の糸― 児童文学の世界』翰林書房 P238 では、この 10 作品を「狭義の意味での児童文 学とよばれるもの」と見ている。

¹³鳥越信は(「芥川龍之介における "童心"」関口安義編(1999)『芥川龍之介作品論集成第5巻蜘蛛の糸―児童文学の世界』翰林書房 P136) で児童作品が9作品と言ったが、それは未完の「三つの指環」を入れたためである

2.2 賞罰の応報を視座として14

芥川の8作品を通して見れば、「賞罰の応報」の視点が浮上する。 その内容から見い出せる共通的な要素「賞罰の応報」を整理すると、 以下の表(1)になる。

表(1) 芥川の童話作品における「賞罰の応報」の要素

| 項目作 | 結末(ハッピー | 賞罰の進展 | やり直す 機会 | エゴによ る失敗 | 人間性(欲のなさ) |
|------|---------|-------|--------------|-------------|-----------|
| 品品 | エンド) | | 100 4 | | ν, α C) |
| 蜘蛛の糸 | × | 罰→賞→罰 | ○ (1回限 り) | 0 | 0 |
| 犬と笛 | 0 | 賞→罰→賞 | 0 | 0 | 0 |
| 魔術 | × | 賞→罰 | × | 0 | 0 |
| 杜子春 | 0 | 賞→罰と賞 | ○(繰り返 し) | 0 | _ |
| アグニ神 | 0 | 罰→罰→賞 | 0 | _ | _ |
| 三つの寶 | 0 | 罰→罰→賞 | 0 | ▲ (国王) | 0 |
| 仙人 | 0 | 罰→罰→賞 | × | _ | 0 |
| 白 | 0 | 罰→罰→賞 | 0 | 〇(擬人) | ○ (擬人) |

記号説明

「○」とは、「あり」という意味で、「×」とは、「無し」の意味である。「一」は、原文では特筆されていないことを意味する。「▲」とは、主人公のことではなく、他の登場人物のことに触れている意味である。

表(1)に挙げた「結末」、「賞罰の進展」、「やり直す機会」、「エゴによる失敗」、「人間性」の5要素は、全て主人公の立場から見たものである。「結末」とは、童話の終わり方のことである。次の「賞罰の進展」は、作品の進展に従って、主人公に与える「賞罰」の有無や「賞罰」生起の順番を意味する。3番の「やり直す機会」は、前項の「賞罰の進展」に即して見られる積極的な教育性あるものである。4番の「エゴによる失敗」は、テキストの表層に出た欲による失敗を意味する。5番の「人間性」は、欲のなさのことを指す。以下、各作品を順番に見てみよう。

「蜘蛛の糸」、「魔術」の2作品を除いた6作品は、ハッピーエンドを迎える結末である。それは、2項目の「賞罰の進展」からも見

¹⁴芥川龍之介の児童文学に関しては、曾秋桂(2010)「児童文学の見地から見た芥川龍之介の児童文学作品-台湾における日本語教育への応用を考えて-」『淡江日本論叢』第 21 輯 P5-30 を参照されたい。

られる。また、「賞罰の進展」がたどり着く所の「罰」は、次項目の「やり直す機会」があるかどうかと関連して来る。ハッピーエンドではない「魔術」は、「やり直す機会」が全く与えられない厳しい現実を思い知らせる。この結果は子供には残酷かも知れないが、人間社会の現実でもあり、社会教育にもなるに違いない。同じく「罰」にたどり着く「蜘蛛の糸」(「罰→賞→罰」)では、「やり直す機会」はただ一回だけで、結局、エゴのため、再び罰が下される結末を迎えただー回だけで、結局、エゴのため、再び罰が下される結末を迎えた。もう一つ、ハッピーエンドを迎えたが、「罰」にたどり着く「仙人」では、「欲による失敗」が描かれていないため、「やり直す機会」の授与を強調する必要もなかろう。逆に言えば、欲のない人間性の主題が一層明確にされるのである。

また、「蜘蛛の糸」(罰→賞→罰)に、「犬と笛」と「杜子春」(賞→罰→賞)が対峙している。「エゴによる失敗」という罰に、本人の素直な人間性のゆえに助けの手が差し伸べられる「犬と笛」は、「蜘蛛の糸」とは正反対のパターンとなっている。さらに「杜子春」では、「やり直す機会」が3回も与えられたため、「賞罰の進展」が寛大に見える。そればかりではなく、「賞罰の進展」のたどり着く所は罰と共に賞を授けられたのである。特に「杜子春」の結末は、「人間らしく生きていく」ことに辿り付いた杜子春の悟りほかならない。「人間らしく生きていく」から、主人公の生き方や信念を含む「人間性」の肯定、人間の持つ性善が示唆されている。

要するに、芥川の児童文学作品では、人間の罪または無垢に対する賞罰の原則を用いて、人間の持つエゴを制裁し、恐い思いをさせる反面、エゴのない人間性にも憧憬していると言えよう。

3. 川端の児童文学作品の特色

一方、川端文学では、小林一郎は児童文学が占める位置の重要さ、 急ぐべき未開拓への注意¹⁵に触れ、川端が昭和43年(1968)10月にノ

¹⁵小林一郎(初1979)「川端康成と児童文学―少年少女小説をふくむ―」(1982)

ーベル賞を受賞した記念として、翌昭和 44 年 (1969) 日本児童文芸家協会が特集として『児童文芸』(3月31日)に「児童文学からみた川端康成」を載せたことをきっかけに児童文学への本格的アプローチが稼動した¹⁶と指摘している。さらに、川端の児童文学への関わりを時代順に見て、昭和13年頃(1938)までが実作時代で、昭和14年(1939)から戦前、戦後に渡り、批評が多く、昭和30年代から40年代にかけて、児童文学全集や選集の発行に協力した¹⁷と小林一郎は纒めた。こうして見ると、児童文学に捧げた川端の姿が自ずとら浮かび上がってくる。しかし、川端のどの作品が児童文学作品に当たるかについては、まだ定説となっていない。

3.1 川端康成の児童文学作品の規定

小林一郎の論文を参照し、入手可能な代表的な6冊の川端児童文学作品集¹⁸を取り上げ、比較したところ、取り扱われた作品はまちまちで、合計32作品になる。取り上げた全集での共通作品は、「級長の探偵」の1作品しかない。こうした状況では、定説のない川端の児童文学作品への規定は大変困難である。ここでは、他の川端作品と共に読めること、現代の読者が簡単に入手できること、芥川の短編児童文学作品との比較という3点を考慮し、短編を収録した『川端康成全集第19巻』(新潮社)の14作品を研究対象とすることにした。

14作品は「級長の探偵」(1929.3 雑誌『少年倶楽部』)、「愛犬のエリ」(1932.7 雑誌『少女倶楽部』)、「翼の抒情歌」(1933.1 雑誌『令

[『]鑑賞日本現代文学⑮川端康成』角川書店 P337

¹⁶同前掲小林一郎論文 P337

¹⁷同前掲小林一郎論文 P340

¹⁸ 『佐藤春夫・室生犀星・川端康成集少年少女日本文学全集第6巻』(昭和41、初出昭和38)講談社、『川端康成少年少女小説集』(昭和43.12)中央公論社、「児童文学からみた川端康成」『兒童文芸』(昭和44.3.31)兒童文芸家協会、古谷綱武の説、長谷川泉(昭和53)「川端康成の兒童文学」『近代日本文学の側溝』教育出版センター、小林一郎(昭和54)「川端康成と児童文学――少年少女小説を含む」『文学論藻』、(1999)『川端康成全集第十九巻』新潮社、(1999)『川端康成全集第二十巻』新潮社

女界』)、「開校記念日」(1933.2 雑誌『少女倶楽部』)、「夏の宿題」(1933.71 雑誌『少女倶楽部』)、「学校の花」(933.9-12 雑誌『少女倶楽部』)、「薔薇の家」(1934.2 雑誌『少女倶楽部』)、「駒鳥温泉」(1935.2 雑誌『少女倶楽部』)、「弟の秘密」(1935.10 雑誌『少女倶楽部』)、「翼にのせて」(1936.6 雑誌『少女倶楽部』)、「コスモスの友」(1936.10 雑誌『少女倶楽部』)、「夏の友情」(1937.8 雑誌『少女の友』)、「試験の時」(1938.8 雑誌『少女の友』)、「兄の遺曲」(1939.4 雑誌『少女の友』)の通りである。以下、考察を纒めて見るにする。

3.2 友情を視座とした川端の児童文学 14 作品

川端の児童文学 14 作品を通して見ると、芥川の「賞罰への応報」ではなく、「友情」という視点が浮上する。その内容から見い出せる 共通的な要素「友情」を整理すると、以下の表(2)になる。

表(2)川端の童話作品に織り込まれた「友情」の要素

| 項目 | 結末(ハ | 媒介物 | 和解(詫 | 背景(学校 | 人間性(思 |
|------|--------|----------|------|-------|-------|
| 作 | ルパーッピー | 2/1 1/2/ | が) | 生活) | い遣り・善 |
| | エンド) | | 0.1) | 1口 / | 意) |
| 級長の探 | 0 | 理科実験の | 0 | 押本先生 | 0 |
| 偵 | | 器械 | | 11175 | |
| 愛犬エリ | 0 | 犬 | _ | 遠藤先生 | 0 |
| 翼の抒情 | 0 | 伝書鳩 | 0 | 遠藤先生 | 0 |
| 歌 | | | | | |
| 開校記念 | 0 | 山雀 | 0 | 須田先生 | 0 |
| 日 | | | | | |
| 夏の宿題 | 0 | 手紙 | 0 | 森本先生 | 0 |
| 學校の花 | 0 | 伝書鳩、桔梗 | 0 | 武田先生 | 0 |
| | | | | 青木先生 | |
| 薔薇の家 | 0 | 駒鳥、鹿、薔 | _ | 益田先生 | 0 |
| | | 薇 | | | |
| 駒鳥温泉 | 0 | 駒鳥 | 0 | 入学試験 | 0 |
| 弟の秘密 | 0 | 犬、猫 | 0 | _ | 0 |
| 翼にのせ | 0 | 鳩 | 0 | 入学試験 | 0 |
| て | | | | | |
| コスモス | 0 | コスモス | 0 | 吉田先生 | 0 |
| の花 | | | | 小沢先生 | |
| | | | | | |
| 夏の友情 | 0 | 百日紅/合 | 0 | _ | 0 |
| | | 歓の木 | | | |
| 試験の時 | 0 | 紙切、着物 | 0 | ジャクソ | 0 |
| | | | | ン先生 | |

「兄の遺曲 │○ │油絵、音楽曲 |○ │学校生活 │○

記号説明

「○」とは、「あり」という意味で、「一」は、原文では特筆されていないことを意味する。

表(2)に「結末」、「媒介物」、「和解」、「背景」、「人間性」の要素が挙げられる。「結末」とは、童話の終わり方のことである。次の「媒介物」は、作品の進展に伴い、重要な意味を持つ物である。3番の「和解」は、前項の「媒介物」を生み出す結果ともなる。4番の「背景」とは、作品が置かれた環境をさす。5番の「人間性」とは、思い遣りや善意を指し、ストーリーからにじみ出て伝わってきたメッセージのことである。

表(2)のように川端の児童文学 14 作品の凡ては、ハッピーエンドになっている。作品中の人物は、学校生活を送っている少女、少年に、先生を配する人物設定¹⁹が大部分である。また、友達の間に誤解が生じても、詫び、思い遣りによってわだかまりがとけ、互いの友情がさらに強く結ばれる。これはまさに人間の持つ善意の結晶に相違ない。その善意の表徴、友情の印として、自然の風物例えば駒鳥、コスモス、桔梗などが使われ、自然と調和している清明な色調で表す、心の温まる話をベースにした作品である。

4. 児童文学作品による川端から芥川への逆照射

上述のように、人間の持つエゴイズムを基調にした芥川の児童文学作品に対して、川端の児童文学作品は、人間の持つ善意を基調にしている。こういった相違を創作動機から考えてみよう。

芥川が最初の児童文学作品「蜘蛛の糸」を創作した当初、1918年 5月16日小島政二郎宛書簡では、「御伽噺には弱りましたあれで精

19 この点については、古谷綱武(1969)「川端さんの少年少女小説に見る日本の生活」『児童文芸』Vol.14 NO.4日本児童文芸家協会 P3 では、「そこに登場してくる先生たちのすべてが、生徒たちの敬愛を受けている。また、先生というものは敬愛すべき存在でもあったのである。それが昔の日本の、子どもたちすべての心の中に生きていた先生というもののイメージでもあったのである。川端さんのこうした作品は、そうした健康であった時代の日本の小学校とその生活とを、たいへんよく記録しているのである」と触れている。

ぎり一杯なんです但自信は更にありませんまづい所は遠慮なく筆削して貰ふやうに鈴木さん(鈴木三重吉のこと・論者注)にも頼んで置きました」²⁰と述べている。児童文学の創作に自信はないと述べているが、それは芥川の謙虚さと受け止められるとしても、児童文学に臨む意気込みはあまりなく、鈴木三重吉の誘いという外発的要因によって、児童文学作品を創作したと言えよう。

川端の児童文学 14 作品のうち、「翼の抒情歌」を除く 13 作品の凡では、当時の児童文学雑誌²¹『少年倶楽部』、『少女倶楽部』、『少女の友』に掲載され、「「おもしろくてためになる」という、「娯楽」と「教化」を兼ねそなえた」²²ものである。1929 年から 1939 年まで児童文学作品を創作し続けたことは、児童文学を創作する動機が明確であることを説明していよう。また、実作だけではなく、『模範綴方全集』(全6巻 1939)を刊行する際に選者として書いた「選の言葉」(綴方について)で、「綴方の尊さも、第一にこの「すなほな心」にある。(中略)素直な心によつて無垢な智慧の光を放つ。(中略)一生失ふべきでない心を振り返り、まことの人の生れつきを省み、これを一筋の道と感じたいものである」²³と述べている。このように、実作でも「綴方運動」でも積極的な行動を伴った川端の児童文学への参与は、意欲的である。芥川のように外的な要因によって児童文学作品を創作したのではなく、本心から進んで、いわば内発的要因によって、川端は児童文学作品に臨んだと言えよう。

4.1 芥川と川端の児童文学作品の対比

違った創作動機によって創作された児童文学の色合いは、両者で 相違している。内発的要因で児童文学作品を創作した川端の作品は、

²⁰(1978)『芥川龍之介全集第 11 巻』岩波書店 P454

²¹同前掲小林一郎論文 P346 では、講談社系の『少年倶楽部』と『少女倶楽部』 は興味性と生活性を旨にしたものであるのに対して、『少女の友』は、通俗性よ りも叙情性を旨にしたのであるという指摘が見られる。

²²同前掲小林一郎論文 P341

²³(1999)『川端康成全集第 27 巻』新潮社 P239 による引用である。なお、これは 1939 年 8 月に東京女子大学で講演された「綴方の話」と重複する所がかなりあ る。

人間の持つ善意による清明な色調を呈している。一方、外発的要因で児童文学作品を創作した芥川の作品は、人間の持つエゴイズムによる暗黒の色調を呈している。川端の児童作品が持つ特色から逆照射すると、芥川の児童文学作品の独自性がくっきりと見えてくる。

さらにこういった対照をなした両氏の児童文学作品を児童文学 の通念や規範と照合すれば、どうなるかを以下、検討しよう。

広義的に言った児童文学作品とは、零才の胎教を含め、4才から12才まで、あるいは15才の青少年までの子供を対象に、「児童本位、文学性、教育性」の特質を兼ね備えた読み物のことである。両氏の児童文学作品は、上述の広義的な定義に合致しないこともなかろうが、芥川の場合は、作品に厳しい賞罰が持っているのに対して、川端の場合は、作品に誤解があっても、誤解が解かれた喜びが待っているのである。そこで、「子どもをいわば神か天使のように清純無垢な魂の所有者と考えるところに最大の特色があった。つまり児童文学はそうした子どものために書かれたべきもの」24という観点を持つ児童文学専門家鳥越信が芥川の児童文学を批判したことは、当然であろう。とはいえ、両氏の児童文学作品は同じく教化の效果を発揮している。ただ、その教化を発揮した側面が違うだけである。

次の喩えを用いてその違った側面の説明を試みたい。生徒を正しく導くべき教師の役目に喩えて見れば、川端の作品はドラマ「3年B組金八先生」(1979-2011の32年間にわたって断続的に制作・放送された教育ドラマ・学園ドラマ)のように生徒に親しみやすい優しいヒューマンな金八先生に当たり、芥川の作品は、ドラマ「女王の教室」(2005)の、生徒に敬遠される悪魔のような鬼教師・阿久津先生に当たる。教師を正面から見る川端の児童文学と、教師を反面から見る芥川の児童文学とは、対比をなしている。生徒を温かく見守り正しく導く手本としての教師にしろ、生徒に罰を与え、世間の厳しさを思い知らせる反面教師にしろ、子供を成長させる点では両氏の

²⁴鳥越信編 (1982)『鑑賞日本現代文学第 35 巻児童文学』角川書店 P29

児童文学作品の持つ教化の意味は変わらない。

4.2 文学におけるジャンルの限界

かつて鳥越信は芥川の文学的営みについて、「小説も童話も、結局は同じものだったのではないか」²⁵と述べた上、共通に見られる主題が「人間のもつエゴイズムの相克」²⁶だと指摘した如く、芥川の小説には『羅生門』、『鼻』などのエゴイズムを描く作品が多くある。一方、川端の場合には小林一郎は、「「孤児の感情」から生まれたものと言えるし、それは自己救済の意味でもあり、同時に他への働きかけにもなっていたのである。『伊豆の踊子』なども、考え様によっては、少年少女小説の変型であると言える」²⁷と見解を示している。ここでは、純粋な心持ちの尊さを強調する気持ちは、実は川端の児童文学作品だけではなく、『伊豆の踊子』などにも脈流している。要するに、それぞれの児童文学のテーマは児童文学に限られるものではないのである。

また、児童文学作品においては、人間の持つエゴイズムによる芥川の作品と人間の持つ善意による川端の作品とは、果たして最後まで並行しているかと言えば、実はそうではない。実は芥川には人間の持つ善意を描いた「蜜柑」(1919)のような作品がある。

二等車に乗る主人公「私」のところに、発車する間際、「三等の赤切符を大事に」(P58)握る「油氣のない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの痕のある皹だらけの兩頰を氣持の惡いほど赤く火照らせた、如何にも田舍者らしい娘」²⁸(P58)が入ってきた。その不潔な服装に「不快」(P58)を覚え、二等車と三等車の区別さえ出来ないことが「腹立たしかつた」(P58)「私」は、「わざわざ踏み切りまで見送りに來た弟たちの勞に報」(P61)いるために、「娘」は「懷に

²⁵鳥越信(1972)「芥川龍之介における "童心 "」関口安義編(1999)『芥川龍之介作品論集成第 5 巻蜘蛛の糸―児童文学の世界』翰林書房 P137

²⁸(1977)『芥川龍之介全集第3巻』岩波書店 P58

²⁶鳥越信(1972)「芥川龍之介における "童心"」関口安義編(1999)『芥川龍之介作品論集成第5巻蜘蛛の糸―児童文学の世界』翰林書房 P137

²⁷同前掲小林一郎論文 P340-341

蔵してゐた幾顆の蜜柑を窓から投げ」(P61)るシーンを見、その瞬間「この時始めて、云ひやうのない疲勞と倦怠とを、さうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅に忘れる事が出來たのである」(P61)。このラストシーンこそ、川端の児童文学作品に相通じる、人間の持つ善意による救済であり、心温まる瞬間に違いない。

逆に芥川のように人間の持つエゴイズムへの処罰、警告を下す作 品は川端にもある。「川端文学の貴重な道標」²⁹だと高く評価された 『掌の小説』に収録された「鈴蟲とバッタ」、「時計」、「夜店の微笑」 の3作が当たる。「時計」では、金時計を見せたがる虚栄心のある女 の所作を見て、主人公法学士が「この花やかな女を、彼女の生んだ 子を背にくくりつけ、この金の腕時計を持つて質屋に行くやうに作 り變へてやらう」30(P40)と考えついた。これは、まさに純粋な心持 ちを失った少女に処罰を与えようとする物語である。また、「鈴虫と バッタ」では、鈴虫をバッタと偽り、少女キョ子に与え、喜ばせた 少年不二夫の憎たらしい所作を見た「私」は、「君の心が曇り傷つい たために真の鈴蟲までがバツタに見え、バツタのみが世に充ち滿ち てゐるやうに思はれる日が來るならば」(P37)と言い、策略に長けた 少年がこのまま大人に成長することが案じられる。これは純粋な心 持ちの中に少しも不純さを許せない心情の表れであろう。そして、 「夜店の微笑」では、「眼鏡屋さん」の少年と「花火屋さん」の少女 とが交わした微笑を見た「私」は、その「微笑」に籠もった「お商 賣柄」(P202)などの不純さを見出し、本当の気持ちだと受け取って ならないと、警告を出した。

このように、両氏の文学に底流している主題は、文学ジャンルとは関係なく、児童文学にも底流している。ここから規範的に捉えられやすい児童文学というジャンルを芥川文学や川端文学に援用するには限界があることが示唆されている。

²⁹長谷川泉(1984·初1965)『川端康成論考増補三訂版』明治書院 P17 ³⁰(1999)『川端康成全集第1巻』新潮社 P40

5. ジャンル分類の意義―結論に代えて

本論文では、児童文学作品において、あまり注目されていない、芥川と川端との比較から、両氏の持つ特色を整理、分析した。人間の持つエゴイズムによる芥川の創作と人間の持つ善意による川端の創作との相違が明白になったが、学級崩壊、学校暴力の深刻さを見せている日本現代社会には、比較的に受け入れられやすい川端の作風を基準に芥川の作風を見れば、芥川作品が果たして児童文学作品と言えるかどうは、よく芥川の研究者を困らせる問題の一つである。確かに、川端の作風を基準に芥川の作風を見れば、芥川の児童文学の暗黒な色調をなしている独自性がはっきりと見出せるが、しかし、それは単に芥川の児童文学作品だけではなく、芥川文学の底に常に流れているものと同質である。とはいえ、逆に人間の持つ善意による川端のような作風も芥川の現代小説にはある。

ここで考えなければならないのは、児童文学というジャンル分類 の問題である。外発的要因にせよ、内発的要因にせよ、創作背景か ら言えば、芥川の児童文学8作品も川端の児童文学14作品も、児童 文学作品ということは十分言えるが、児童文学作品という枠で括る と、児童文学作品たるべき規範、定義が自然に生まれて、作品の読 みを左右し、なかなかその枠から抜け出せない。入門的読者であれ ば、各文学者の文学を理解する上で、ジャンルの分類は必要かもし れないが、ずっとその枠に拘束され、児童文学作品と言えるか、そ れとも児童文学作品と言えないのかという見解の争いを続けても、 これ以上意味のある結論は出せないであろう。今回の考察を通して、 文学研究でジャンルという枠をいつまで必要とするかという問題が 生まれる。各文学者の文学的営みを総体的に見る場合、一旦、児童 文学作品を含めてジャンル分けの枠を外したほうが、むしろ広く深 くまた高く実質が見えてくるのではないか。枠作りは、芥川や川端 のような多くの作品を残した有名な作家の場合には、見取り図やガ イドブック的役割を果たし理解の助けになるが、読者がベテランに なればなるだけ、いつまでも見取り図やガイドブックに頼っている

と、それに拘束されて考え方が硬直化し、作品の実質や広がりを見落とすステレオタイプ化が進行するする危険性を伴うことを、今回の考察で改めて身を持って知らされた。研究の進んだ芥川、川端のような有名な作家は、ガイドによる団体ツアー客ではなく、本当にその風土(作品)に親しもうとする個人旅行者を求める時期が必ず訪れることを忘れてはならないであろう。

テキスト

(1999) 『川端康成全集第 19 巻』全 37 巻新潮社 (1977-1978) 『芥川龍之介全集』全 12 巻岩波書店

参考文献

- 1. 山本健吉編(1969·初1959)『近代文学鑑賞講座第13巻川端康成』 角川書店
- 2. (1966·初 1964)『佐藤春夫·室生犀星·川端康成集少年少女日本 文学全集第 6 巻』講談社
- 3. 長谷川泉(1984·初1965)『川端康成論考増補三訂版』明治書院
- 4. (1968) 『川端康成少年少女小説集』中央公論社
- 5. 古谷綱武(1969)「川端さんの少年少女小説に見る日本の生活」『児 童文芸』Vol. 14 NO. 4 日本児童文芸家協会
- 6. 長谷川泉(1978)『近代日本文学の側溝』教育出版センター
- 7. 小林一郎(初 1979)「川端康成と児童文学―少年少女小説をふくむ ―」(1982)『鑑賞日本現代文学⑮川端康成』角 川書店
- 8. 海老井英治(1981)「本文及び作品鑑賞」『鑑賞日本現代文学⑪芥川 龍之介』角川書店
- 9. 鳥越信編(1982)『鑑賞日本現代文学第 35 巻児童文学』角川書店 10 大阪国際児童文学館編(1993)『日本児童文学大事典第 1 巻』大日本図書
- 11 鳥越信(1994)『近代日本児童文学史研究』おうふう
- 12 関口安義編(1999)『芥川龍之介作品論集成第5巻蜘蛛の糸―児童

文学の世界』翰林書房

2011年5月14日投稿受理 2011年6月7日審査通過